

レポ ー ト



熟議 2012 in 兵庫大学の論議

—地域社会における生涯学習社会の構築と大学・自治体の役割—

兵庫大学学長室長 副島 義憲

1 背景と開催趣旨

2009年に成立した民主党政権において、従前の政府による公共サービスの提供から、多様な担い手での供給への転換を意味する新しい公共とそれを可能にする地方主権の考え方が示された。実際、最近の地方政党の躍進や東日本大震災での NPO やボランティアなどによる自主的で組織化された活動にそうした政策の背景が垣間見られる。こうした中、そのガバナンスにおいて議会制民主主義を補完する役割として期待される一つが、住民によって課題に対して熟慮するとともに議論を行う「熟議」である。こうした熟議の機会を増やすことにより、地域や国の課題を国民が共有し、国の政策への関心を増進し市民社会の深まりと民主主義の成熟に寄与することが期待されている。

文部科学省では、こうした背景を踏まえ、「地域と共生する大学づくりのための全国縦断熟議(通称:大学リレー熟議)」を実施するに至った。その趣旨は、「大学は、地域や社会の知の拠点として、住民の生涯学習や多種多様な主体の活動を支えると同時に、地域や社会の課題を共に解決し、その活性化や新たな価値の創造への積極的な貢献が求められている」とされ、多様な主体やその協働を支える知の拠点としての位置づけを大学に与え、熟議の舞台としている。特に、リアルな議論の機会が少ないことも踏まえ、学生にも、学習の機会として参加の機会を与えることを推奨している。

兵庫大学での熟議「熟議 2012 in 兵庫大学」では「生涯学習」をテーマとする。それは、兵庫大学の使命の一つに「地域の生涯学習機会の拠点として社会人の受入れ推進と地域社会への貢献をめざす」を掲げており、実際に公開講座の充実を図り、高齢者学習機関である「いなみ野学園」との教育連携協定を締結するなど、鋭意、生涯学習の推進をしているためである。

生涯学習の環境は、大学をはじめとする教育機関、国、地方公共団体等における取り組みを通じ整いつつあるが、一方では「学習成果を生かせる活動の場が少ない」、「学習成果を生かして活動したい側の希望と、それを受け入れる側(行政、施設、サークルなど)への要請を調整する仕組みが十分でない」等の声も多く寄せられている。2006(平成 18)年 12 月の教育基本法改正の際、生涯学習の理念が「国民一人一人が、自己の人格を磨き、豊かな人生を送ることができるよう、その生涯にわたって、あらゆる機会に、あらゆる場所において学習することができ、

その成果を適切に生かすことのできる社会の実現が図らなければならない」とされているように、学習者の学習成果を社会の営みや諸活動に生かすことやそれを支援する生涯学習支援システムは課題となっている。

そこで、これらの問題に焦点をあて、地域の人々とともに生涯学習のあり方を考えるとともに、学習成果を生かすためにどのような方策が必要か、など、地域社会全体の絆の向上に資する生涯学習社会の構築に向けた、異なる世代による熟議を行うことが開催趣旨である。熟議を本学で開くことによって、地域社会での「生涯学習社会の構築」に市民の問題意識を深め、その生涯学習社会で地域に立脚する大学への期待を探りたいと考えた。以下は、熟議への本学の取り組みと論議の内容である。

2 熟議実施までの流れ

(1) 熟議プロジェクトチームの編成

「熟議 2012 in 兵庫大学」の開催企画は、2012 年 3 月 21 日開催の大学運営会議(本学の最高意思決定機関)で提案し、承認を得た。これは、「熟議」が組織的な取組であることを明確にするための学内手続きであったが、結果的に、その後の様々な展開において、この意思決定が極めて有効に作用した。例えば学生ファシリテーターの各学科からの選出、記録係の職員の選出などにおいて、関係部局の全面的な協力を得た。後に述べるが、熟議終了後、参加者や本学関係者から高い評価を得た大きな要因の一つとして特記しておきたい。

その後、開催日当日までの準備作業を組織的に行うため、学科横断の教員 6 人と学長室の職員 2 人からなる「熟議プロジェクトチーム」(PT)を学長が編成し、発足させた。PT では、プログラムの検討、論点整理、参加者への資料作成、学生へのファシリテーション指導、当日の詳細な設計など、頻繁にミーティングを重ね、役割分担による準備作業を精力的に進めた。このような教職協働による実施体制が機能したことも高評価を受けた要因の一つであるといえよう。

なお、PT では、「熟慮の段階」、「議論の段階」、「共有の段階」、「振り返りの段階」そして「活動の段階」の 5 つを「熟議 2012 in 兵庫大学」の基本コンセプトとして実施することにした。

(2) 論点と資料の提供

熟議では熟慮の機会を与えることが重要である。そのために、参加者に対し事前に資料を提供、自らの考えを整理することを促した。事前資料の提供について説明すると、熟議参加者には参加申し込み時に、3つのサブテーマから自分が参加したいテーマを選んでもらい、その希望に沿って PT でグループ分けをおこなった。そして参加者に各参加テーマの決定を伝えると同時に、「熟議の進め方」、「生涯学習に関する基礎知識」、「論点整理シート」等を資料として送付した。併せて参加者自身の考えを予め整理してもらうため、論点ごとの「意見・コメントシート」を送付し、自身の考えを記入してもらった(表 1)。

これは、『熟慮』+『議論』=『熟議』という法則の、『熟慮』の徹底を意図したものである。

その理由だが、本学の「熟議」では、高校生から 70 代までの幅広い年齢の参加者層という特長もさることながら、参加はもとより『熟議』という言葉すら聞いたこともない人もいることが分かった。そこで参加者の議論が、2 時間余の限られた時間の中で有効に展開できるようにするための方策として考えたものが、関係資料の事前提供である。

また論点の指定は、話が逸れるのを防ぎ、一定の方向性を導き出すためには、ある程度のルールを敷いておく必要があると判断したからである。

そして記名式による「『熟議 2012 in 兵庫大学』参加者・アンケート」を送付し、アンケート調査を実施した。このアンケート調査は熟議の事前と事後で実施し、その質問内容を事前事後で共通させることにした。このことにより課題に対する考え方の変化や熟議に対する期待と成果など、熟議終了後の参加者の意識動向を把握できるようにした。

■表 1 サブテーマと論点

サブテーマ① 「地域における生涯学習の必要性とは…」	論点①	学校外の青少年活動(ボーイスカウトや地域スポーツなど)は生涯学習に役立つか
	論点②	地域の防災、安全、環境保全等の地域づくりに、生涯学習を活かすことはできるか
サブテーマ② 「生涯学習をいっそう推進するには…」	論点①	“個人の主体的な学習姿勢”か“行政による環境づくり”か
	論点②	生涯学習社会では学校・大学はどうあるべきか
サブテーマ③ 「学習者の学習成果を活かすためには…」	論点①	そもそも学習成果はどれのものか
	論点②	学習成果は“評価されるもの”か、発表・活動等により“発揮されるもの”か

(3)ファシリテーターの養成

前述のとおり、兵庫大学での「熟議」の特長の一つは、学生がファシリテーターを務めることである。PT では、各学科から選出(または自薦)されたファシリテーター担当の学生の研修を計画的に実施することにした。研修は、外部講師とPTメンバーで行い、生涯学習社会に関する基礎知識の習得、ファシリテーションの技術や考え方、進行の管理を行うに必要な情報、介入の仕方、議論が紛糾した場合の対処など、ワークショップ演習などを通してファシリテーターを養成した(表2)。「熟議」におけるファシリテーターの経験は、学生が、「学士力」「社会人基礎力」を高める絶好の機会にもなった。

【ファシリテーター研修の様子】



■表 2 ファシリテーター研修プログラム

第 1 回研修会	5 月 23, 25 日	熟議、生涯学習社会等についての講義
第 2 回研修会	6 月 6、8 日	ワークショップ演習
第 3 回研修会	6 月 23 日	進行の最終確認、議論の集約、ロールプレイング
第 4 回研修会	6 月 25 日～適時	最終予行練習
「熟議」本番	7 月 1 日 (日)	学生 14 人がファシリテーターとして進行を務める
反省会	7 月 18, 20, 30 日	熟議当日の振り返り、各自発表

3 開催日当日の内容

「熟議 2012 in 兵庫大学」は、2012 年 7 月 1 日 (日)、本学を会場に(表 3)の日程で開催した。

■表 3 「熟議 2012 in 兵庫大学」日程

13 : 00～13 : 45	開会
	主催者挨拶
	発題
	オリエンテーション
13 : 50～15 : 00	熟議 (前半)
15 : 10～16 : 25	熟議 (後半)
16 : 30～17 : 15	グループごとの発表
17 : 15～17 : 30	講評
	閉会挨拶
18 : 00～19 : 30	懇親交流会

【熟議当日の様子】



当日は、地域住民をはじめ、高齢者学習機関のいなみ野学園の学生、地元の高校生、企業、行政など、異なる世代の 101 人が参加した。また傍聴参加 49 人及び共催の文部科学省から大臣官房審議官はじめ 5 人の出席を得て、開会した。

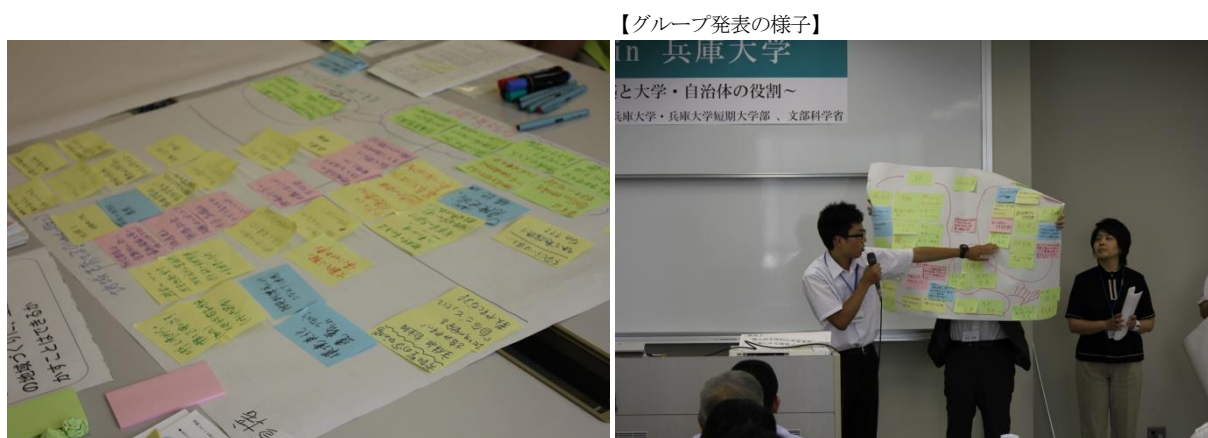
熟議の開催にあたって、主催者として、本学三浦隆則学長から「本学の熟議の特長として 2 つある。一つは高校生、大学生を含め、異なる世代や立場の方に参加していただいている、という点。

二つ目の特長は、学生の学習の場として、本学学生が司会進行やファシリテーターを務めるということである。本日の熟議は、本学の人材育成方針である『学生ののびしろを最大化する教育』を实践する機会である。参加者の皆さんは、奮闘している学生を、厳しくも温かい目で見守っていただき、共同で学生を育てていってください。」との挨拶があった。

続いて共催者として、文部科学省上月正博大臣官房審議官から「熟議には、①学習効果、②人と人との関係をつなぐ効果、③自分の考えを表現するトレーニング効果、④地域社会の問題を解決していくプロセスを進化させる効果、などがある。

2 時間の熟議では課題に対する解答は容易に出ないと思うが、新たな気付きから学びへと進化していくことが重要である。参加者個々人の環境や背景に応じた形で、人とのつながりや議論が継続していくことを期待している。」との挨拶があった。

その後、サブテーマごとに、1 グループを概ね 8 人の参加者で構成し、計 12 グループによる熟議(ワークショップ)を開始した。各テーブルでは、ファシリテーターとして初めて挑戦する本学学生の進行で議論が始まり、活発な意見が交わされた。



4 熟議の内容

(1) 3つのサブテーマにおける発表

2 時間を超える「熟議」を終えた後、グループごとの発表があった。各グループの中での、主な意見を以下に記す(表4)

■表4 グループ発表における主な意見

サブテーマ	論点	主な意見
①地域における生涯学習の必要性とは…	論点① 学校外の青少年活動(ボーイスカウトや地域スポーツなど)は生涯学習に役立つか	生涯学習は、青少年にとって、学校外での大人との交流をもつことができる場として、また地域社会について知る場としても役に立つ。一方、指導者にとっては、自分が経験してきたことを地域に還元することができる場となる。また、地域の伝統文化を伝えていく場、地域において躰を教えられる場としても、生涯学習は必要であろう。しかし、学校のクラブ活動もあるため、地域の青少年活動への参加者は少ないのが現状である。今後地域と学校がいかに連携を進めていくかが課題である。

	<p>論点② 地域の防災、安全、環境保全の地域づくりに、生涯学習を活かすことはできるか</p>	<p>生涯学習を活かし、地域で環境美化運動や防災訓練等の活動を行ったり、地域が一体となって活動に取り組むことは、地域を活性化させ、地域を育てることになる。また個々で学んだことを地域で活かすことは、自分をさらに育てることにもつながる。地域づくりに生涯学習を活かすためには、まず自分の地域を好きになることが必要である。また、地域を好きになるためには、地域のことをもっと知らなければならない。他人任せではなく、当事者意識を高めることが地域づくりに重要であろう。</p>
<p>②生涯学習をいっそう推進するには…</p>	<p>論点① 「個人の主体的な学習姿勢」か「行政による環境づくり」か</p>	<p>個人の学習姿勢と環境づくりを対置させて議論するのではなく、その循環的關係に着目した議論が中心となった。とりわけ個人の学習姿勢を起点としていたのが特徴である。生涯学習に関心を示す個人が、行政の環境づくりの中で学習し、その循環關係が地域活動への参画の契機になり、さらには地域への還元にもなるという発展的なビジョンについて議論された。</p>
	<p>論点② 生涯学習社会では学校・大学はどうあるべきか。</p>	<p>議論された内容が①学習成果の発表、②家庭教育の充実、③カリキュラムの充実、④学習機会の提供、⑤地域との連携強化、⑥教育の本質の強化・充実の6点に整理された。そのなかでもまず学校は教育の本質の強化・充実に努力することが必要であると強調された。そのうえで、大学は、家庭教育、社会教育の充実にたいするサポートをするべきである。</p>
<p>③学習者の学習成果を活かすためには…</p>	<p>論点① そもそも学習成果はだれのものか</p>	<p>開示された意見を、学習成果は「自分のもの」「仲間のもの」「地域社会のもの」と3つに分け、それらを学習の時系列として捉えようとした。最初の段階では未熟な状態であるため学習者自身のものであるが、成熟するにつれて、仲間のもの、そして地域のものとして段階的に推移するモデルが提案されている。さらには、仲間とのつながりが第一段階の個人の学びの原動力となるとともに、第三段階の地域への発信力となると仮定されている。これら3つの段階は地域社会の内部で成されるものであり、具体的な場所としては主に公民館や大学が考えられている。さらに地域社会の内部で得られた成果が、「人間力」「コミュニケーション力」「地域住民の共通意識や意識改革」へと発展する可能性を指摘した。</p>
	<p>論点② 学習成果は”評価されるものか”か、発表・活動等により“発揮されるもの”か</p>	<p>開示された意見が、評価を個人がどのように捉えるかという点から、評価を必要とするものと必要としないものに分類された。趣味的成果は必ずしも評価されなくてもよく、学問的成果は評価されるものとなった。趣味的成果については自己満足であったり、他者から評価されない自由が担保される必要がある。一方、学問的成果は評価されることで、さらにレベルアップして発揮されるものとなる。また、いずれの成果も発表や活動の場を見つけることで発揮され、人間力や絆など発展的な成果をもたらすことになる。発揮する場所が容易に見つからなければ、まずはボランティア活動が良いのではないか、と提案されている。これらの成果は、理想としての地域社会のあり方や、不安のない社会の構築の基盤になると考えられた。</p>

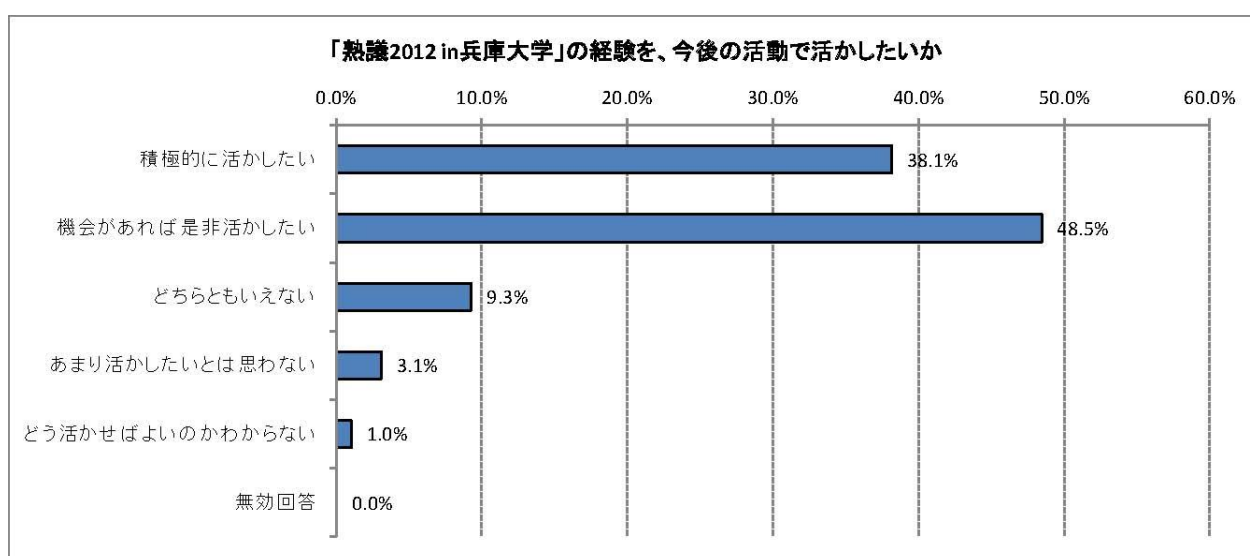
(2) 事後アンケートからみる参加者の評価

参加者 101 人に事後アンケートを実施、そのうち97人が回答(有効回答率96%)した。この結果、「熟議 2012 in 兵庫大学」への満足度は、「とても満足」54.6%「まあ満足」37.1%であり、この二つを加えた全体の満足度は 91.8%だった。また、「熟議の経験を、今後の活動で活かしたいか」という質問には 86.6%の人が活かしたいと回答した(図 1)。地域社会における生涯学習社会の構築を企図した今回の取組は、参加者から一定の評価を得たことに、ファシリテーター学生、PTメンバーを含め関係者一同、安堵するとともに次の展開に向けた構想の着手に、弾みがついた。

◆ 「熟議 2012 in 兵庫大学」の経験を、今後の活動で活かしたいと思えますか。1つ選び番号を記入してください。

回答者数=97 人

(図 1)



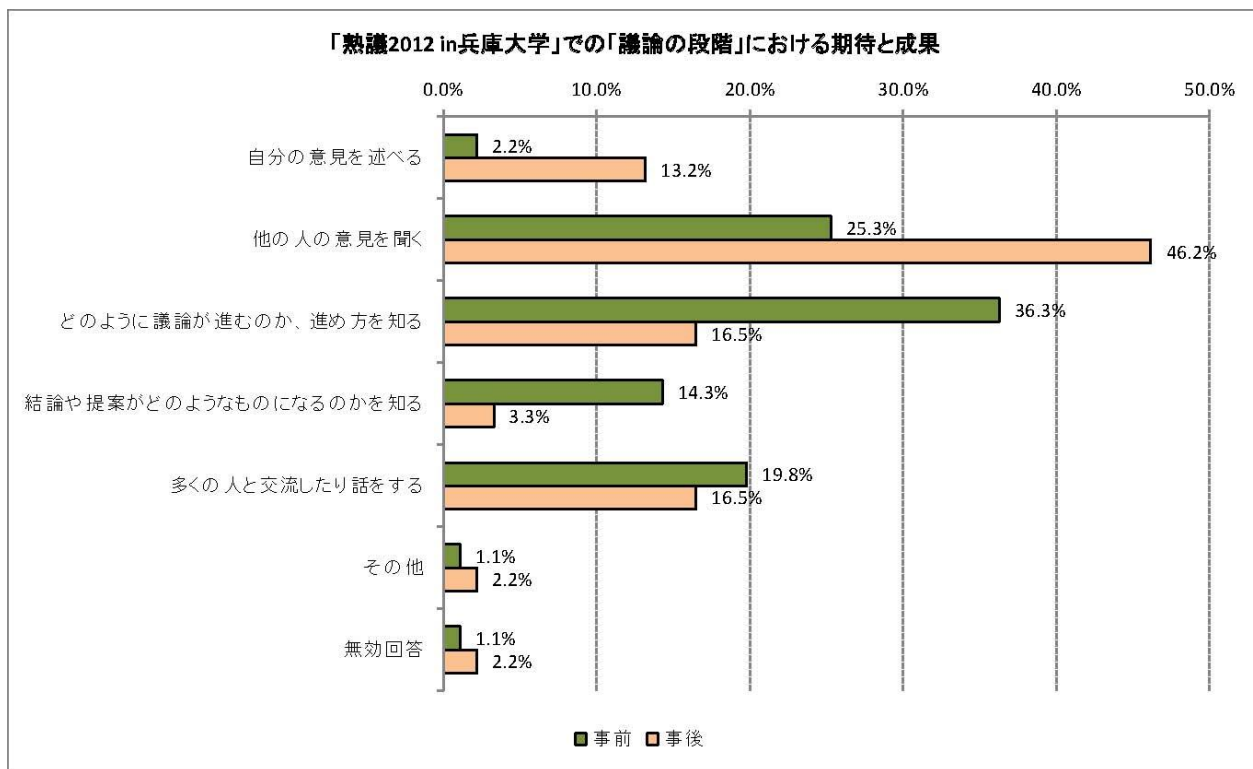
次に「熟議 2012 in 兵庫大学」での「議論の段階」における期待と成果について事前事後の考えを聞いたところ、「他人の意見を聞く」が事前 25.3%から事後 46.2%に、また「自分の意見を述べる」も 2.2%から 13.2%に増加した。これは、他の人の意見を聞いた上で自分の意見を重ねていくという「熟議」の手法を実際経験したことで得られた成果ではないかと思われる。また、これを最若年層の高校生 12 人に絞ってみると「他の人の意見を聞く」が 16.7%から 66.7% (50 ポイント増) の大幅な増加となった。これは年長者との議論の経験が少ない高校生が、熟議の議論の場で、課題に対する多様な意見があることがわかり、視野が広がるとともにその重要性に気付いた結果といえるのではなかろうか。

◆ 「熟議 2012 in 兵庫大学」での「議論の段階」において、あなたはどのことに最も大きな期待を持っておられますか。

「熟議 2012 in 兵庫大学」の「議論の段階」で、あなたにとってはどのような成果がありましたか。1つ選び番号を記入してください。

回答者数=91 人

(図 2)

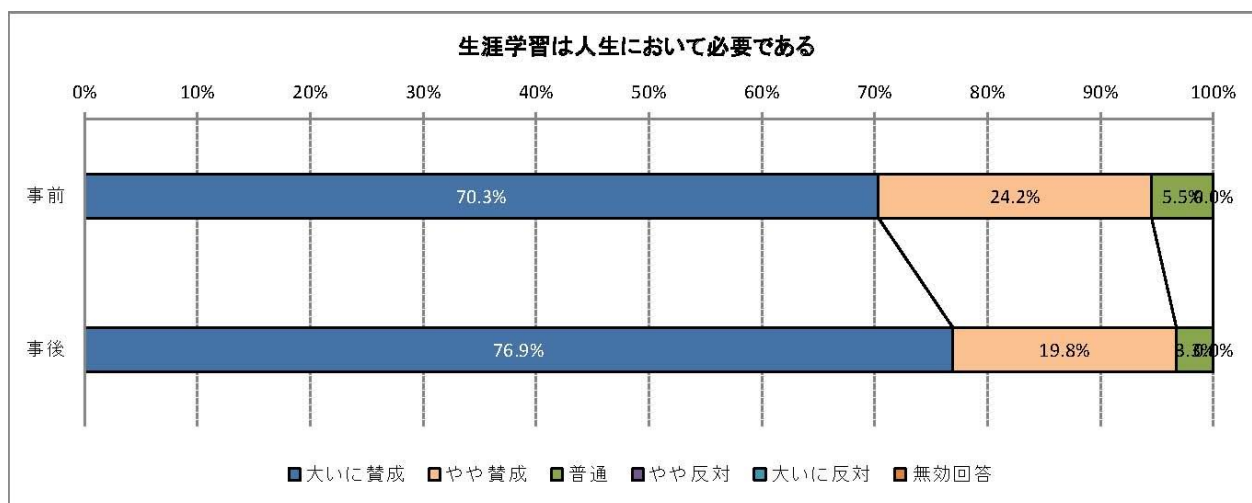


次に、「生涯学習は人生において必要である」との意見に対する考えを聞いたところ、「大いに賛成」と「やや賛成」を合わせると、事前事後ともに 90%を超える結果となり、生涯学習に対する全般的な意識の高さがうかがえた。一方、同設問を高校生で見ると、事前が 75%であったのに対し事後は 100%となり、生涯学習の必要性に対する意識の向上がみられた。(図 3)

◆生涯学習についてあなたはどのようにお考えになりますか。それぞれの設問について、あてはまるもの1つに○をつけてください。

◇生涯学習は人生において必要である 回答者数=91人

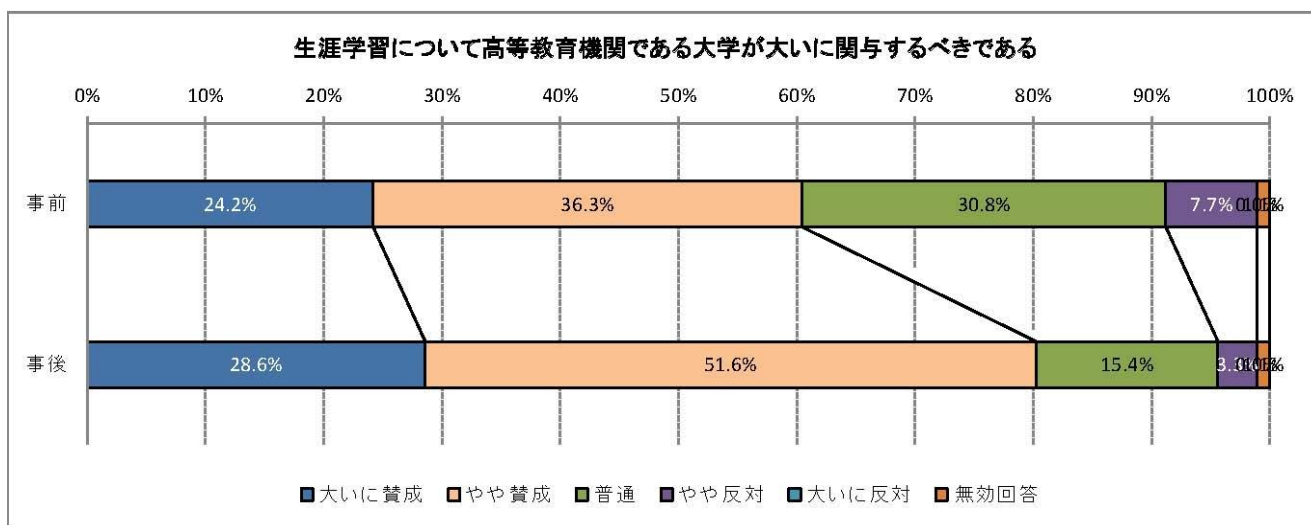
(図 3)



さらに「生涯学習について高等教育機関である大学が大いに関与するべきである」という意見に対する考えを聞いた(図 4)。その結果「大いに賛成」と「やや賛成」を合わせた値が 60.5%から 80.2%に増えており、生涯学習の振興に対する大学への期待の大きさがうかがえた。一方、高校生についてみると、事前では「大いに賛成」が 0%であったのに対し、事後は 41.7%と著しく増加しており、本熟議での議論が「大学」と「生涯学習」の関連性を強く意識させるきっかけとなったようである。

◆生涯学習について高等教育機関である大学が大いに関与するべきである 回答者数=91 人

(図 4)



(3) ファシリテーターの成長

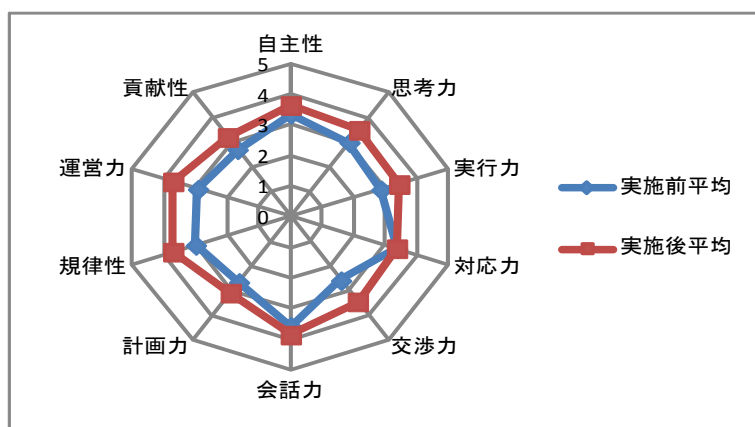
熟議では、本学学生 14 人がファシリテーターを務めた。前述したとおり熟議では、「学生の学習の場」を目的の一つとした。そこでこれらの学習成果を計測する方法として「学士力」「社会人基礎力」を基に独自の「自己認識シート」を作成、学生はこの「自己認識シート」を使って熟議前と熟議後に 5 段階で自らを点検、評価した。その結果「対応力」を除く全ての項目で自己評価ポイントが上昇。

特に「交渉力」、「規律性」、「運営力」では、0.7 ポイント以上の大幅な伸びがみられた(表 5) (図 5)。学生が初めてファシリテーターという大役を経験したことで、自らの成長を実感できたことは、熟議に教育的意義を見出して実施した本学の構想の成果として、率直に嬉しい限りである。

■表 5 自己認識シートによる自己評価

(図 5)

能力項目	実施前 平均値	実施後 平均値	増減
自主性	3.36	3.64	+0.29
思考力	3.00	3.50	+0.50
実行力	2.86	3.43	+0.57
対応力	3.36	3.36	+0.00
交渉力	2.57	3.43	+0.86
会話力	3.57	3.86	+0.29
計画力	2.64	3.07	+0.43
規律性	3.00	3.71	+0.71
運営力	2.93	3.71	+0.79
貢献性	2.71	3.21	+0.50



5 今後の課題

何をもって「熟議」の成功というのだろうか。UEJ ジャーナル第7号掲載の『イギリスにおける1887年の「大学拡張」の熟議レポート』(香川正弘理事長執筆)によると、熟議によってなされた決議が実行されること、というシンプルな解が得られる。そういった意味では、本学の熟議はようやくスタート地点に立ったと言わざるを得ない。しかし、「熟議」が成熟した市民社会における重要なツールとなっているのは、その過程にも重要な意義があるため、兵庫大学での熟議「熟議2012 in 兵庫大学」は、その試金石となり得たのではないだろうか。熟議参加者におかれては、「熟議2012 in 兵庫大学」で出会った仲間とともに、その成果を今後の地域での活動につなげていただきたいと思う。

主催大学としては、高校生をはじめ多くの参加者が「再び熟議に参加したい」という気持ちを表したことを大切に、地域の知の拠点として、今後、多様な主体との連携を視野に、地域の課題解決に向けた熟議を継続、推進していきたいと考えている。そしてその原動力になるため、実施体制の確立と生涯学習振興に関する教職員の意識付けを深め、さらなる社会貢献活動を展開していきたいと決意している。

副島 義憲 (そえじま・よしのり)

1950年、佐賀県生まれ。福岡大学法学部卒業。地元企業に就職後、1994年学校法人睦学園に就職。兵庫大学 教務課長、教務部次長、学生センター事務部長、入試センター事務部長等を経て、現在、学長室長。「大学における『キャリア形成』って何？」(2004年大学行政管理学会第8回定期総会・研究会)；「学生の自発的活動を促進する試み」(2003年日本私立大学協会学生生活指導部課長相当者研修会)；「職員人事評価制度と人材育成-小規模大学の試みとその事例-」(2009年 私学経営研究会セミナー)；「職員人事考課制度と人材育成」(2009年 日本私立大学協会事務局長相当者研修会)等の研究発表・講演；「大学行政管理学会『職員・教学研究会』の活動の歩み」2008年の編集。大学行政管理学会、日本高等教育学会、NPO 法人全日本大学開放推進機構会員。